

P・ベルナルデ著

『アフリカにおける農業・牧畜の統合——コート・ジボワールの半移牧民プール族——』

Philippe Bernardet, *Association agriculture-élevage en Afrique: les peuls semi-transhumants de Côte d'Ivoire*, パリ, Éditions L'Harmattan, 1984年, 235ページ

I

アフリカの食糧危機は近年国際的に大きな関心を集め、その原因と対策をめぐる議論が各方面で高まっている。しかし、アフリカの食糧・農業問題と一口に言っても、国によって地域によって、それは同一のものではないし、その対策もただ一つのものが見出せるわけではないであろう。農業は地域的特性が強いので、アフリカの農業問題に取り組むためには、そこに生きる農民を対象とした実態調査にもとづく、地域レベルの農業および農村社会の研究が必要であるように思われる。本書はこのような視点に立つひとつの事例研究として、またその方法論を示すという意味においても、示唆に富む有益な研究であると言える。

本書は、西アフリカのコート・ジボワール北部に近年、オート・ボルタ（現ブルキナ・ファソ）、マリなどのサヘル地域から移住してきた牧畜民プール族^(注1)を調査対象として取り上げ、その定着化に伴う生産様式の変化を、農業と牧畜の統合、および農耕民と牧畜民の紛争というダイナミックスのなかで解明しようと試みたものである。

著者フィリップ・ベルナルデは、「序言」において本書の性格を次のように述べている。現地調査の研究成果を発表する方法としては、読者が限定される学術論文(thèse)ではなく、また調査から得られた諸結果の総括と結論のみを提示する一般書でもない、いわば両者の中間にあるような本を著わすことがふさわしいように思われる、と。そして本書では、現地調査における著者の個人的観察と牧畜民に対するインタビューという方法で得られた情報にもとづき、抽出された諸結果を忠実に描く

という方法がとられている。特に30以上に及ぶ図表によって提示された数量的データは、プール族の実像を描き出す基礎をなしており、また調査したプール族のキャンプに関する写真も多数含まれている。著者は、「さまざまな調査結果を総括したり、決定的な結論を引き出すことを取って避け、いくつかの推論や仮説を提示するにとどめる」と述べ、結論を導き出すのは、読者自身に委ねている。

著者フィリップ・ベルナルデは、1950年生まれで、80年にパリの社会科学高等学院(l'École des Hautes Études en Sciences Sociales)を卒業した。ソルボンヌ大学において、「ブラック・アフリカの伝統的社会における農業労働過程の研究」と題する学位論文によって博士号を取得した。同年、フランスの国立科学研究センター(C. N. R. S.)のアフリカ社会学地理学研究室に席を得、現在同研究センター研究員である。1981年、ユネスコの企画した「人間・生物圏プログラム」に参加し、「コート・ジボワールのサバンナの機能と利用」と題するテーマで、本書の基礎になった、プール族の伝統的牧畜の研究を行なうために1年間、コート・ジボワールに滞在した。現地調査は、1981年の6月から8月の雨季に行なわれた。調査対象となった北部ニエレ郡(Sous-Préfecture de Niellé)に分布するプール族のキャンプ30カ所は、畜産開発公社(Société pour le Développement des Productions Animales: SO.DE.PRA.)の資料にもとづいて選択された。著者は、調査期間中毎日、1人のプール人通訳を伴って、キャンプ地に調査に出かけた。

なお、本書の構成は次のとおりである。

序 言

第1章 移動するプール族

第2章 農業—牧畜の統合

第3章 プール族の牧畜

第4章 不平等なプール族社会

第5章 紛争と矛盾

結 論 紛争の研究からプール族生産様式の内的・外的矛盾の解明に向けて

II

第1章では、まずコート・ジボワール北部に近年移住してきた牧畜民プール族の定着化現象が、コート・ジボワール社会に提起する問題とその重要性について述べている。

この20年間にプール族が移住、定着化した地域は、北緯9～11度、西経5～8度の間に位置する北部4県、フェルケセドゥグ (Ferkessédougou)、コロゴ (Korhogo)、ブンジアリ (Boundiali)、オジェンネ (Odienné) に限定されるが、この地域は等雨量線1300～1500mmのラインで区切られる湿潤なサバンナ地帯であり、ツェツェばえの被害という観点からすると、コート・ジボワールのなかでは人畜にとって最も安全な地域である。プール族は、飼養する家畜、ゼブ (zébu, こぶ牛) とその雑種メレ (méré) が、ツェツェばえによって感染するトリパノゾーマ症にかからないように、ツェツェばえの発生地帯を避けて分布しているのである。プール族の飼養する牛の頭数は、上記4県の合計が約23万頭 (1980年) にのぼるが、この数字がいかに重要な意味をもつかは、コート・ジボワール北部8県に分布するコート・ジボワール人農耕牧畜民の所有する牛 (taurin, 牝牛) の合計が約33万頭であることから明らかであろう。そのうえ、プール族の人口はわずかに1万人余で、これは上記4県の農村人口の2割にすぎない。ここで問題となるのは、家畜の所有頭数が伝統的に豊かさの証明であるこの地方において、少数のプール族牧畜民が、北部に分布する家畜頭数の4割を所有するという事実から生み出される社会的な不平等感である。その結果、セヌーフォ (Sénoufo) 族あるいはマリンケ (Malinké) 族などの農耕民と、プール族牧畜民との間の紛争が生じている。このような紛争は急速に増加しており、コート・ジボワール政府は、混乱を避けるために、1974年以降、「ゼブ計画」を作成することを決定し、その実施・運営を SO.DE.PRA. に委ねた。

このように、プール族の移住、定着化の問題は、もはやコート・ジボワール北部の経済、社会生活におけるマージナルな現象にとどまらず、この地域の構造的変化を惹き起こそうとしている。この変化の過程を解明しようとする著者は、コート・ジボワールのプール族の定着化が提起する特殊・個別な問題の解明を通じて、農業と牧畜の統合、農耕民共同体と牧畜民共同体との関係という、より一般的な問題を提起することができるであろうと考えている。

さて次に、コート・ジボワールのプール族移住者の出身地については、1982年2月現在家長1202人のうち、約55%がオート・ボルタ出身、35%がマリ南部の出身 (調査対象となったニエレ郡では、112人のうち68%がオート・ボルタ、32%がマリの出身) であった。また、プール族の牛19万190頭のうち60%以上がオート・ボルタか

ら、30%がマリ南部から移入されたものであった。

ニエレ郡へのプール族の移住が始まったのは、1963年であるが、移民が増大するのは69年以後であり、特に70年代後半から80年代初頭にかけて急激に増加している。この移住の直接的原因は1969年から74年にかけてのサヘル地域の大旱魃の影響と考えられるが、著者は移住の原因を歴史的視点から長期的展望のなかで検討している。

コート・ジボワールに移住したプール族はその起源を歴史的に遡ると、17～18世紀、マリ、オート・ボルタのスーダン地帯にあった王国の支配階級が、その後権力を失って移住してきたものである。16世紀以前のプール族は、移動牧畜 (transhumance) を行なう遊牧民であった。15～16世紀、西アフリカはアラブ世界との商業関係によるイスラム化に伴い、諸王国が成立したため、遊牧民プール族は、これら王国の南縁に集中して、自らの独立を守るために王国をつくるに至ったのである。このとき、定着化したプール族は農業への依存を強め、著者の言葉を借りれば、ここに「封建的」・「奴隷制的」生産様式が生み出されたのである。しかし、19世紀末になると、フランスの植民地政府は、奴隷制を廃止し、軍事的支配を強化することによって、この「封建的」・「奴隷制的」生産様式を完全に破壊した。プール族は、混乱期を経て1920年以後、他部族からの支配を免れる手段として、牧畜へと回帰することになる。こうして、プール族は北部と南部の2方向に移動を始め、ここに移動牧畜が再び発展した。その後、1960年代のアフリカ諸国の独立は、プール族の移動を南部の方向に転換させる。マリ、オート・ボルタなどのサヘル地域の貧しい国々に分布していたプール族は、独立にともない実施されることになった家畜への課税から逃れるために南下する。そして、全く異なる歴史的要因として、1970年代の旱魃は、40年も前から始まっていた南部への移動の動きに拍車をかけることになった。

ここで著者は、農業により依存していた「封建的」・「奴隷制的」生産様式から、牧畜に重点が移行した「家父長制的」生産様式への移行という仮説を立てている。「家父長制的」生産様式は、サバンナ地帯に分散する生産単位をもち、家畜は生産手段としてだけでなく、生産単位の長とその家族集団にとって、最大限の自治と独立を守るための政治的手段としても重要性をもってくる。このような経済的・政治的単位で移動するプール族は、しかし今、コート・ジボワールに定着しつつあり、まさにこの変化のなかにあるプール族を、著者は次

の四つのカテゴリーに分類し分析している。(1)遊牧民 (Peuls nomades): 2年以上同じ地点に留まらないプール族。数カ月で移動する者が最も多い。(2)半定着民 (Peuls demi-stabilisés): 遊牧生活の後、2年以上前から一地域(20部以内)に留まっている者。キャンプ地はこの範囲内で移動しうる。乾季に移動牧畜を行なう者もいる。(3)定着民 (Peuls stabilisés): 3年以上前から固定したキャンプ地をもっており、家畜はその周辺で放牧されるが、移動牧畜も行なわれる。(4)定住民 (Peuls sédentaires): 10年以上前から定住化し、村を形成している者。ここでは、牛による犁耕で農業が行なわれており、また牛乳生産を中心とした牧畜は老人や女性、子供が担っている。

このように、移住してきたプール族牧畜民は定着化への願望を抱いているが、その多くは、住居のみを固定し、同時に移動牧畜も行なおうとするものであり、ここに著者は、農業と牧畜の特殊な結合にもとづく新しい生産様式が生み出されつつあると述べている。

第2章では、プール族移住民が農業と牧畜をどのように統合していったのかについて検討される。著者はまず定着化の過程を図式的に描く。習慣的に乾季の終わりに移住、定着化するプール族は、最初に住居のための土地を開墾し、草葎小屋を建て、家畜の牧養地(parc)を確保する。次に農業を行なうための土地が開墾されるが、農地は多くの場合、木の枝で作られた柵で囲い込まれる。このような囲い地は、プール族の牛の「夜間牧養地」(parc de nuit)としても利用された。サヘル地帯のプール族が、農業と牧畜を結びつけるうえで、この「夜間牧養地」が重要な役割を果たす。つまり、牛を「夜間牧養地」に収容することは、その土地の施肥のために有益であり、しかも移動することで、いくつもの耕地の施肥に費用と労働力がかからないという利点がある。このように、「夜間牧養地」と耕作地とのローテーションによって農業と牧畜が統合され、耕地面積が拡大していく。コート・ジボワールに移住してきたプール族は、ここに農業・牧畜の統合システムを生み出したのである。結論的には、コート・ジボワールのプール族は、定住化をめざす、すでにかなり安定した牧畜農耕民で、牛を役畜として使う農耕が重要であり、農業生産物は、ほとんどが自給向けのミレットとトウモロコシである。ベルナルデの調査結果によると、この地域では1人の生存を維持するためには0.53%の耕地が必要であるのに、プール族の耕地面積は1人当たり平均0.36%であり、農業がその食糧需

要をみたく割合は、平均68%である。

次にプール族の牧畜について、第3～4章で検討される。牧畜は、コート・ジボワールのプール族牧畜農耕民に食糧の不足分を補充するために必要な資源となる。そして、食糧供給分を超える余剰部分は、消費財の購入に向けられ、さらに蓄財をつくり出す。

第3章では、まずプール族の牧畜を規定する要因として、自然条件(植生分布と牛の生命再生産のサイクル)、経営様式、雇用労働力と家族労働力について検討される。調査結果によると、乾季における牛飼いは、労働力の69.5%が主に家畜を所有しない貧しいプール族から創出される雇用労働者に依存し、残りの30.5%は家族労働力である。また、1980年における1キャンプ(生産単位としての集団)当りの家畜頭数と労働力の平均値をみると、牛の飼養頭数が182頭、キャンプの家長の妻の人数が1.8人、その子供が4.6人、雇用された牛飼いが1.1人、その他管理人などを含め、キャンプ全体の消費者数は9.2人であった。なお、牛飼いの雇用数は、経営規模(家畜頭数)に比例して増加する。

第4章では、家畜の所有権の問題、牛乳生産、牛の種類別の経営規模別分布、牛の商品化の問題などが検討される。1キャンプは、ほぼ1家族で構成され、各キャンプの家長はその家族集団の家畜の所有者である。家長は男女を問わず、子供に1頭の若牝牛を与え、彼が死んだ時、家畜の所有権が子供に相続される。娘の場合は、結婚時に家畜の所有権が父または長兄に移行する。そして彼女は夫のキャンプに移り、そこで夫から新しい若牝牛を受け取り、その生産物(牛乳)は彼女のものとなる。妻は、農業労働と収穫物の輸送の仕事からは免れており、主に牛乳生産とその商品化の仕事に従事し、その収入は彼女が管理する。

ここで興味ある問題は、プール族牧畜民の妻の相対的な「解放」の手段となる牛乳生産が、プール族の「家父長制的」生産様式のなかに一つの矛盾を導入するという点である。牛乳の商品化は、販売地点(市場)の近くにプール族のキャンプを設置させるように強いるので、農耕民によってすでに占有された地域に定着することになる。このように定着化の方向に向かうと、プール族の「家父長制的」生産様式の特徴であった独立性が徐々に失われることになる。また、牛乳生産の結果、家畜が1カ所に集中すると、収穫時に家畜が畑を荒らし、栽培作物に損害を与えて、農耕民と牧畜民との対立、紛争が生じる。しかし逆に、畜産物は、地域の農耕民との商業関

係によるつながりを深め、農耕民共同体と牧畜民共同体とを結合させる要因となる。

次に牛の商品化率についてみると、1キャンプ当りの家畜の飼養頭数に対するその比率は平均8.1%であるが、経営規模が小さく、耕地面積の少ないキャンプほど、生存に必要な農産物の購入などのために、家畜の商品化率が高くなる。以上のような分析の結果、著者は、プール族社会は、個々の生産単位が均等なものではなく、定着化が進み農業との統合、牧畜生産の商品化による農耕民との統合が進むにつれ、富める者と貧しい者の格差が拡大しつつあることを指摘している。

第5章では、牧畜民プール族とコート・ジボワール人農耕民との対立、紛争の実態とその原因が分析され、そのうえで解決の道を模索するコート・ジボワール政府行政当局の対策について検討される。

この紛争というのは、農耕民がプール族の家畜によって栽培作物にうけた損害に対し、プール族の牧畜民に賠償を要求するというものから、武装した戦いの様相を呈するもの、さらにはプール族を定住地域から家畜とともに追放しようとするものまで、さまざまな形であらわれた。たとえば、特に顕著なブンジアリ (Boundiali) 地方でのプール族とセヌーフォ族との紛争では、殺人が起こり、プール族のゼブ牛が追放された。また、他のいくつかの地方においても、栽培作物を荒らすゼブ牛が銃殺されたり、プール族を追放しようとする農民によるプール族キャンプへの放火事件、殺人事件が相次いだ。これらの紛争の主な原因として著者は次の四つを挙げている。(1)プール族の家畜が農耕民栽培地の作物に与えた損害、(2)プール族の家畜によって施肥された土地の他部族による横領、(3)プール族キャンプへの放火、(4)プール族の家畜・栽培作物の他部族による略奪。この分析の結果、著者は紛争がプール族を外からの侵入者とみなすことによって激化していることに警鐘を鳴らし、真の解決の必要性を説いている。

政府・行政当局の対応は、1974年3月の大統領の国内視察時に、地方の行政官からのプール族をめぐる紛争の訴えが大統領に取り上げられるに及んで本格的に開始された。1974年に「ゼブ計画」が作成され、SO. DE. PRA. などによるいくつかの政策が打ち出される。まず、農耕民との紛争の起こっている地域のプール族を、土地が占有されていない地域に移動させようとする西部ラ・パレ (La Palé) 山岳地域整備計画と、飼料作物栽培の導入による放牧地の改善を目的とする北部ロクポホ (Lokpoho)

の農耕牧畜地帯の整備計画を挙げるができる。前者は移住させられたゼブ牛がツェツェばえの被害を受け、大部分のプール族が周辺の農耕地域に避難してしまい失敗に終わった。1978年には、北部 SO. DE. PRA. は、「ゼブ計画」による牧畜整備単位 (Unités d'Aménagement Pastoraux, 以下 U. A. P. と略) の創設を開始した。これはまず、農地の占有率のより少ない地域において、家畜を囲い込む柵と水場をつくり、次に飼料作物栽培を導入しようとするもので、27の U. A. P. が創設された。これは後に、農業・牧畜単位 (Unités Agro-Pastorales) 創設計画に改変され、プール族の牧畜と農耕民の農業との統合が目標として掲げられた。

しかし、著者は、行政当局のこのような空間的整備を中心とする政策は表面的なものであると批判し、牧畜農耕民であるコート・ジボワールのプール族が現地の農耕民との紛争を解決し、農業・牧畜を発展させるためには両者間での契約と農産物・畜産品の交換という関係を結ぶ以外に方法はないと述べている。この契約とは、農耕民の畑と休閑地をプール族の家畜が施肥するのと引き換えに、プール族は居住、牧畜、耕作のための土地の譲渡を受け、耕作地の再編成をすすめるというものである。そうすることによって、家畜の経営管理の困難が克服され、栽培作物の損害が減少するであろう、と著者は言う。

III

以上、本書の内容を叙述の流れにそって簡単に紹介した。最後に改めて著者ベルナルデの提起した問題点を整理し、評者の感想を述べてみたい。

プール族のコート・ジボワール北部サバナ地帯への移住、定着化は、大きく次の二つの問題を提起していると言えよう。第1は、プール族自身が生存を維持するための方法として、どのように農業と牧畜を統合し、生産様式を変革していくのか、という問題であり、第2は、プール族の移住民を受け入れる側のコート・ジボワール社会にとって彼らの移住、定着化はどんな意味があり、これにどう対応していくのかという点である。

まず第1の点について、著者の視点はプール族の自発的な自己変化を擁護するものであり、農業と牧畜が統合していく過程を、見てきたとおり、詳細な事実分析にもとづいて明らかにしている。この点は、第三世界の農村開発計画の多くが、農民は合理的に組織化できる対象と

みなすことによって、農民の主体性を失わせるような政策を打ち出していることを暗に批判しているとも読みとることができよう。植民地化以後、再び牧畜民になったプール族は、コート・ジボワールに定着化しつつある現在、農業への依存をより強めることによってプール族内部の統合、そして周辺部のコート・ジボワール人農耕民との統合によってコート・ジボワール社会に組み込まれつつあるように思われる。このような相対的な統合と経済的発展は、同時に新しい不平等を生み出す危険性があると、著者は述べている。生産手段が一部の者に集中するに伴い、プール族内部の相対的な格差が拡がり、経済的に豊かな少数者と農村の小生産者である大衆との対立が生まれる危険性があること、さらには部族間の隔りが深まっていくであろうことが指摘されている。

第2の問題については、プール族牧畜民の定着化に伴う農業・牧畜の統合の動きは、コート・ジボワールの農業開発にとっても有益であるとする立場から、著者は政府行政当局の政策もこの方向に進められるべきであると主張する。プール族の定着化した北部サバンナ地帯は、コート・ジボワールのなかでも経済成長から取り残され、自給自足農業が支配的な地域であるが、国内の食料自給をめざす農業開発政策のなかで、今後、穀物、牧畜生産の発展が期待されているのである。しかし、移住してきたプール族と現地コート・ジボワール人農耕民との紛争が増えるに伴い、プール族を家畜とともにその定住地域あるいはコート・ジボワールから追放すべきであるという強硬な考え方が一方では生まれた。これに対し、著者は紛争の根本的原因を分析することによって、このような考え方を批判し、農耕民と牧畜民との生産システムを通じての相互扶助の関係を確立することが、このサバンナ地域の農業・牧畜生産の発展に必要であると説いている。しかし、著者の主張するような条件がコート・ジボワールの定住農耕民の側にあるのかという点も今後検討すべき問題であろう。

ところで、プール族の移住定着化は、コート・ジボワール国内の牧畜生産にどのような影響を与えたのだろうか。この20年間にコート・ジボワールにプール族とともに移入されたゼブ牛は20万頭余にのぼり、牧畜生産が増加したものと推察される。実際、コート・ジボワールの畜産品生産の変化をみると、牛肉は1970年の5200トから80年には1万1000トに増加し、牛乳は同期間に4000トから1万トになっている(注2)。他方、これらのゼブ牛の移出国であるマリ、オート・ボルタでは、この20年間に牛

肉などの畜産品生産は減少したのだろうか。コート・ジボワールは、これらの国々から牛肉などを輸入していたが、プール族の移住に伴うゼブ牛の国境を越えた地域的移動によって、これら西アフリカ諸国間の畜産品の貿易構造に変化がもたらされたのだろうか。これらの点は、西アフリカ全域の食糧問題として、今後解明されるべき課題であろう。

以上、評者の関心に従って問題点を整理してみた。本書の冒頭において著者は「……決定的結論を引き出すことを避け、推論や仮説を提示するにとどめる」と述べているにもかかわらず、本書は単に現地調査の報告にとどまらず、著者の見解はかなり明確に示されていると言えよう。それは、農業と牧畜を統合することによって、現在プール族が生み出しつつある新たな生産様式を、歴史的視点から捉えようとする点にあった。すなわち、かつて遊牧民であったプール族は、17世紀以降「封建的」・「奴隷制的」生産様式を生み出し、19世紀末になると再び牧畜に回帰することによって「家父長制的」生産様式へと移行する。そして、定着化に向かう現在、貧富の格差が拡がりつつあることが指摘され、新たな生産様式の生み出される方向性が示唆されている。しかし、ここで著者の言う「封建的」・「奴隷制的」生産様式の実態は明らかにされていないし、またこのような生産様式の移行という視点からなされる歴史的分析が、アフリカ社会の解明にどのような有効性をもつかは、多くの議論を呼ぶ点であろう。このような問題にもかかわらず、本書は、アフリカ農業が現在抱えている諸問題のいくつかを明らかにしたという点で一読に値する書であり、また緻密な実態分析は、積極的な読者を著者とともにプール族社会の研究へといざなっていくことであろう。本書のなかで著者が示唆した理論的研究への発展が今後期待されるところである。

(注1) ここで「プール族」(Peuls)と呼ぶのは、西アフリカのスーダン地帯から中央アフリカまで広く分布し、その呼称もフラニ(Fulani)、フルベ(Fulbe)、フィラニ(Filani)、フル(Ful)、プール(Peul)、プロ(Pullo)など多様に呼ばれている部族である。本書で分析対象とするのは、近年コート・ジボワールに移住定着化したプール族に限定されている。

(注2) 藤井宏志『コート・ジボワールの農業』国際農林業協力協会 1985年 75ページ。

小山田紀子(津田塾大学国際関係
研究所非常勤研究員)